資料②

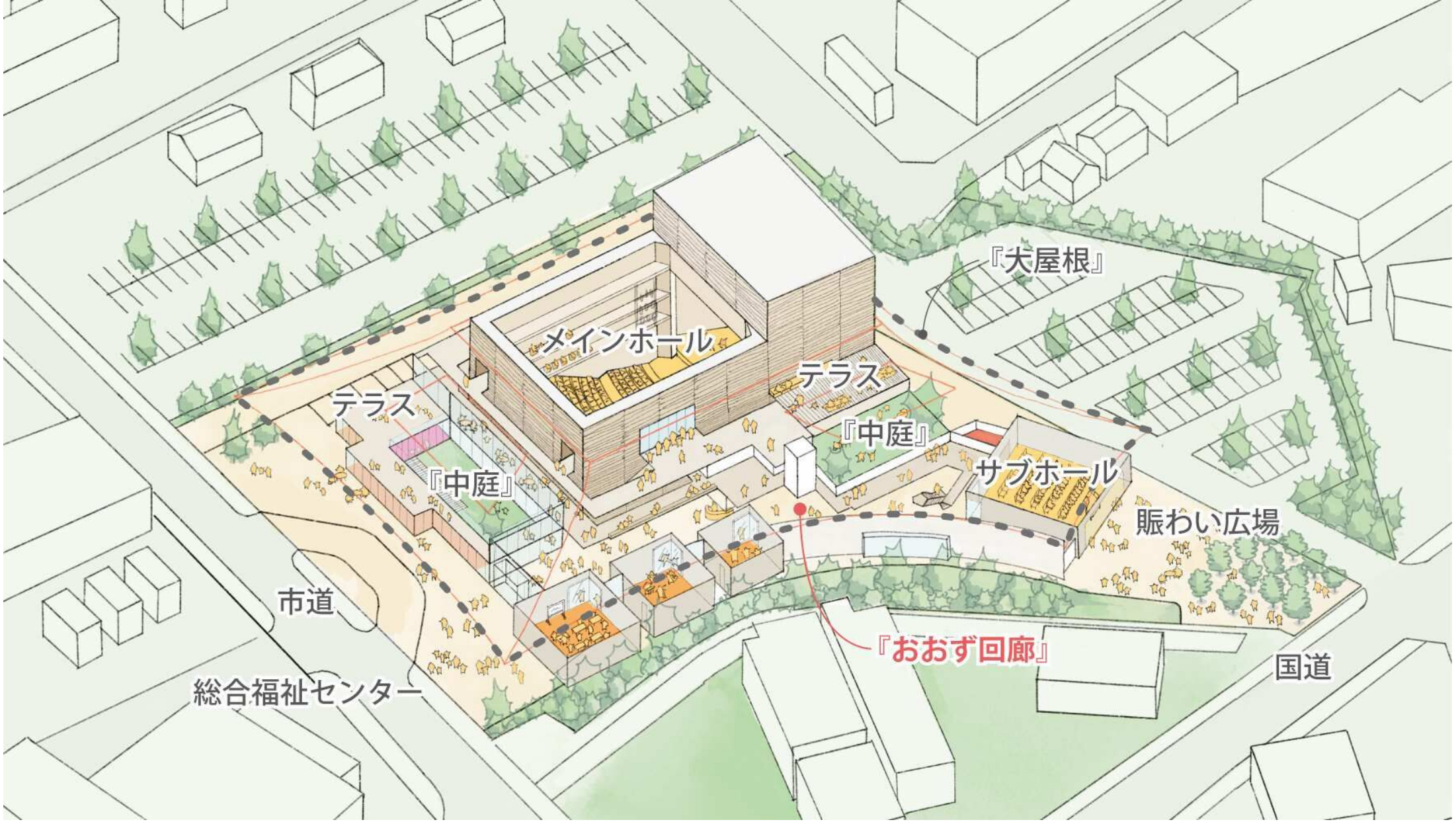
大洲市民文化会館 プロポーザル

＜抜粋版＞

令和５年３月１９日

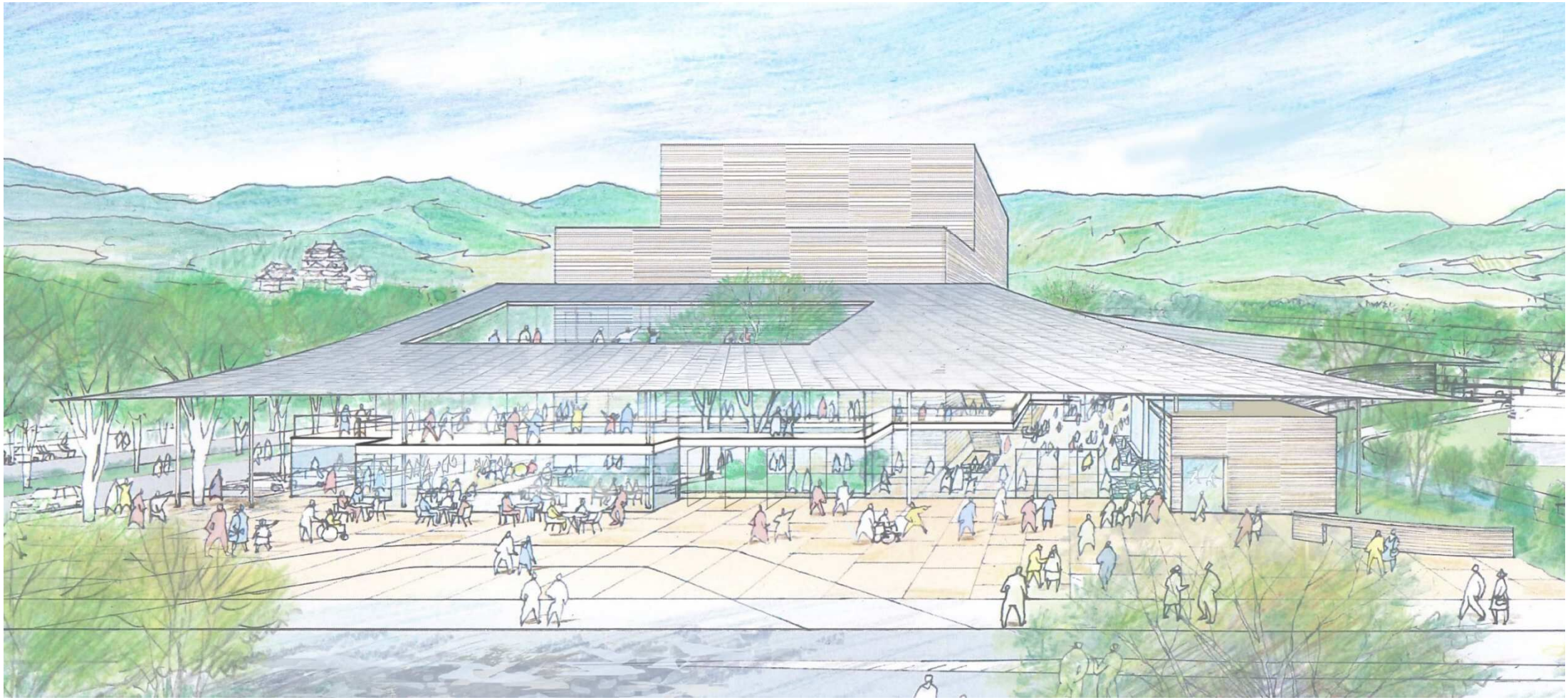
◎“ひとつ屋根の下（もと）、日常的な活動の場をつくる”　これが提案の特徴

ホールと、そのまわりのシンプルな屋根で、穏やかで、やさしい姿をつくる



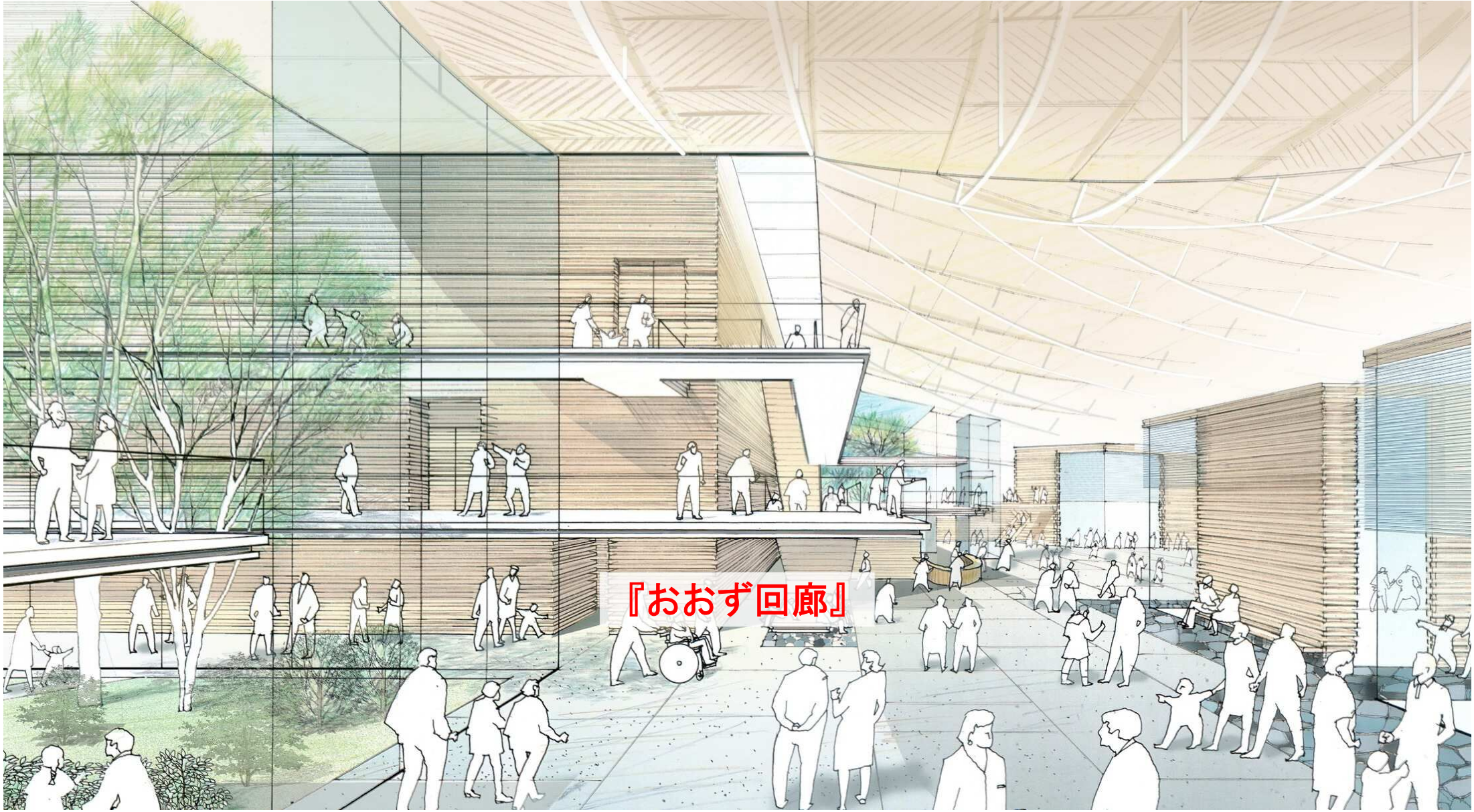
◎この屋根を外したイメージ
屋根の下は、いたるところが市民の活動の場

◎メインホール、サブホール、活動室など、全てを1階に配置
国道側から福祉センターまでをつなぐ『おおず回廊』を設ける



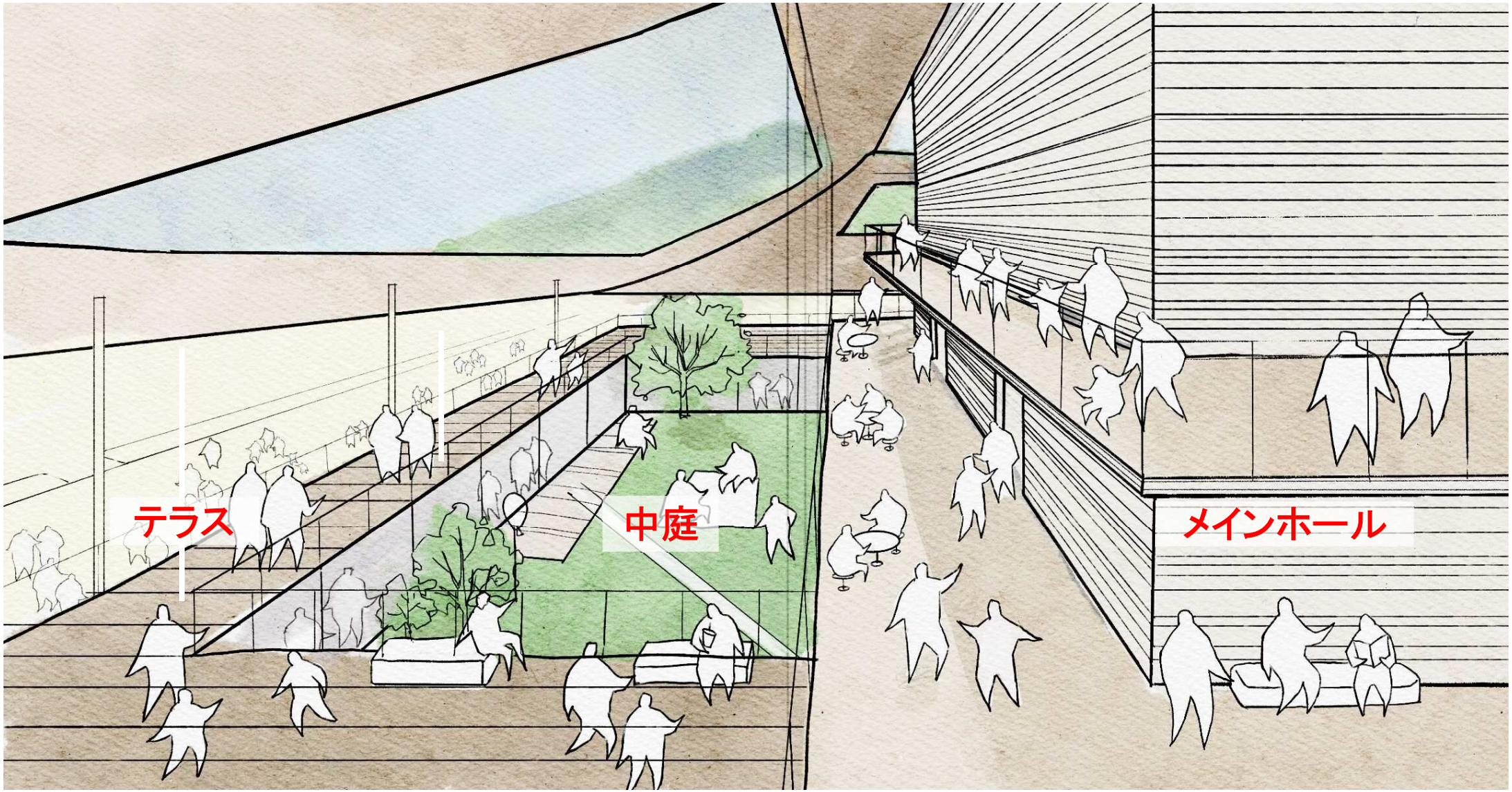
◎総合福祉センターから見たイメージ

屋根の軒下からは、市民のさまざまな活動の姿が、にぎわいとなってまちに映し出される



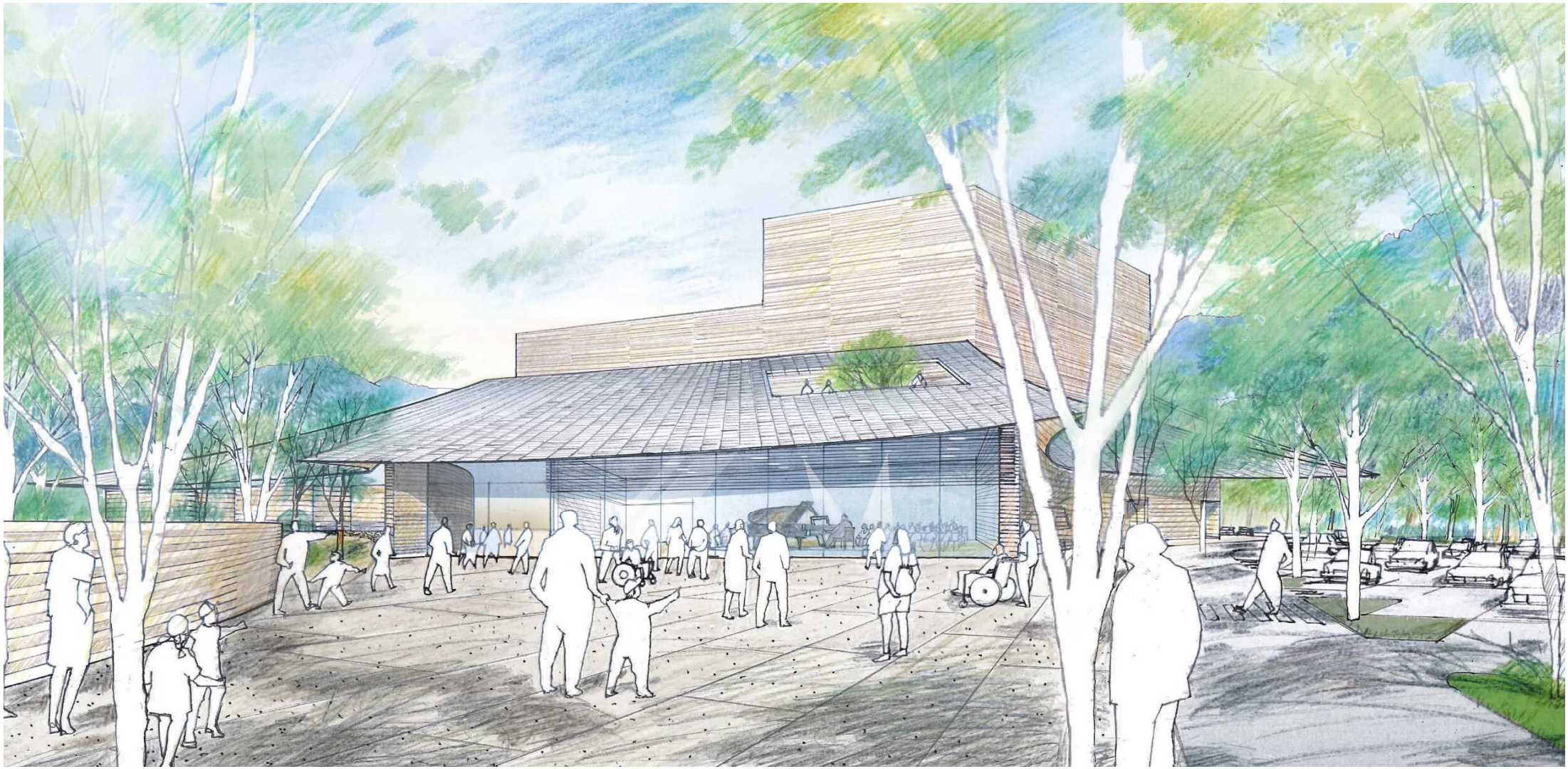
◎屋根の軒下をくぐって内部に入ると、活動の場が目に飛び込んできます。
この空間が『おおず回廊』

◎城下のまちのように、光や風といった自然の恵み、木の文化も感じられるように、
“緑の中庭“そして”木質の空間”の中に“回遊路“を巡らせる



◎『おおず回廊』には中庭があり、光が差し込み、風が通り抜ける

そのまわりは、テラスやラウンジなど多様な交流の場。市民の居場所



◎国道側から見たイメージ。

『おおず回廊』は総合福祉センターから国道側までつながり、活動の姿を映し出す

ポイント

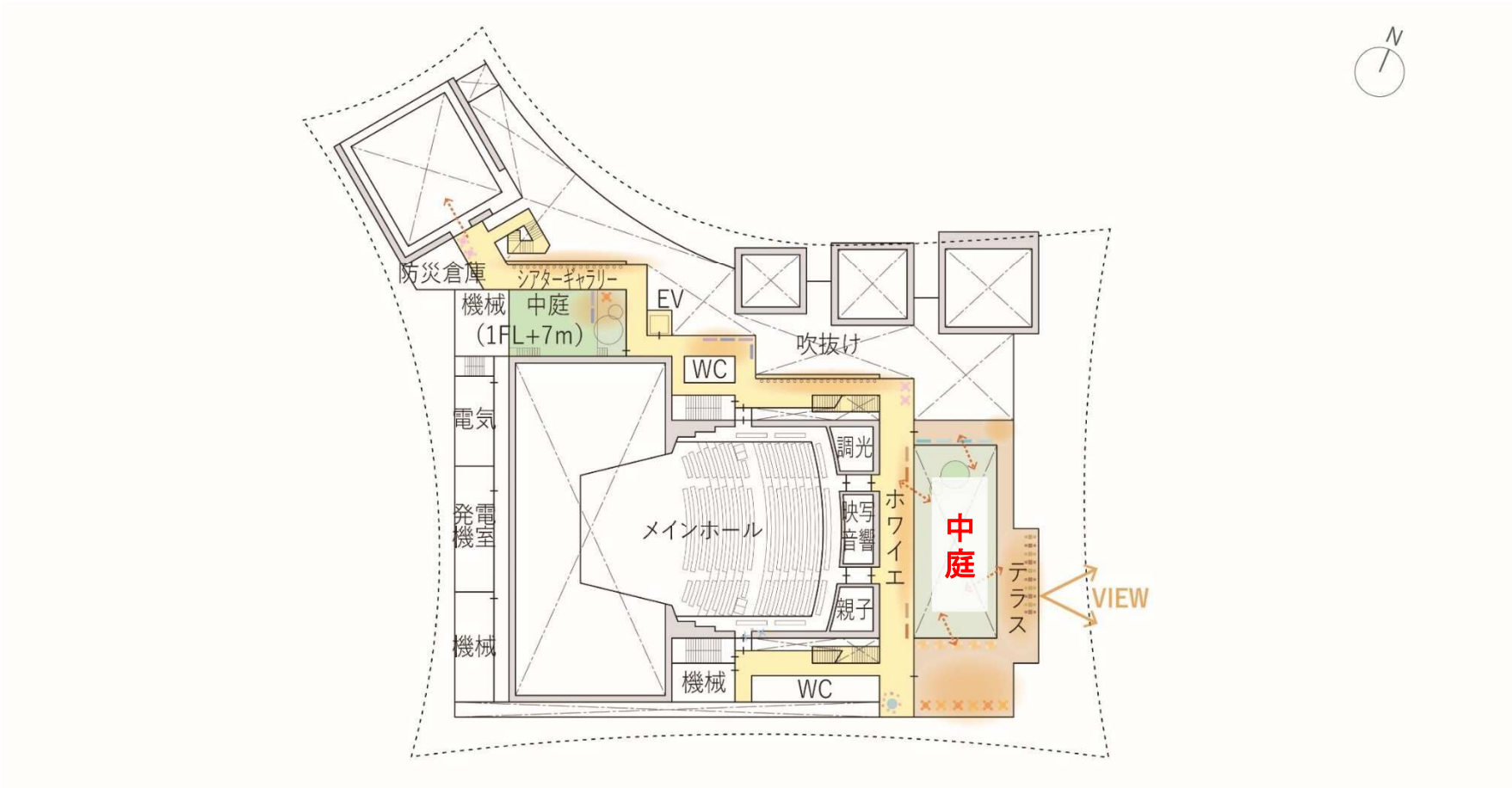
❶　『おおず回廊』は活動の場をつなぐ

❷　『中庭』も日常の居場所

◎1階は「すべての活動が顔を出す」階
『おおず回廊』に面して、メインホール、活動室、サブホールの活動の姿が顔を出す

◎特徴的なのは「中庭」
まちに向き、カフェコーナーがあったり、気軽に立ち寄ることができる、日常的な市民の居場所

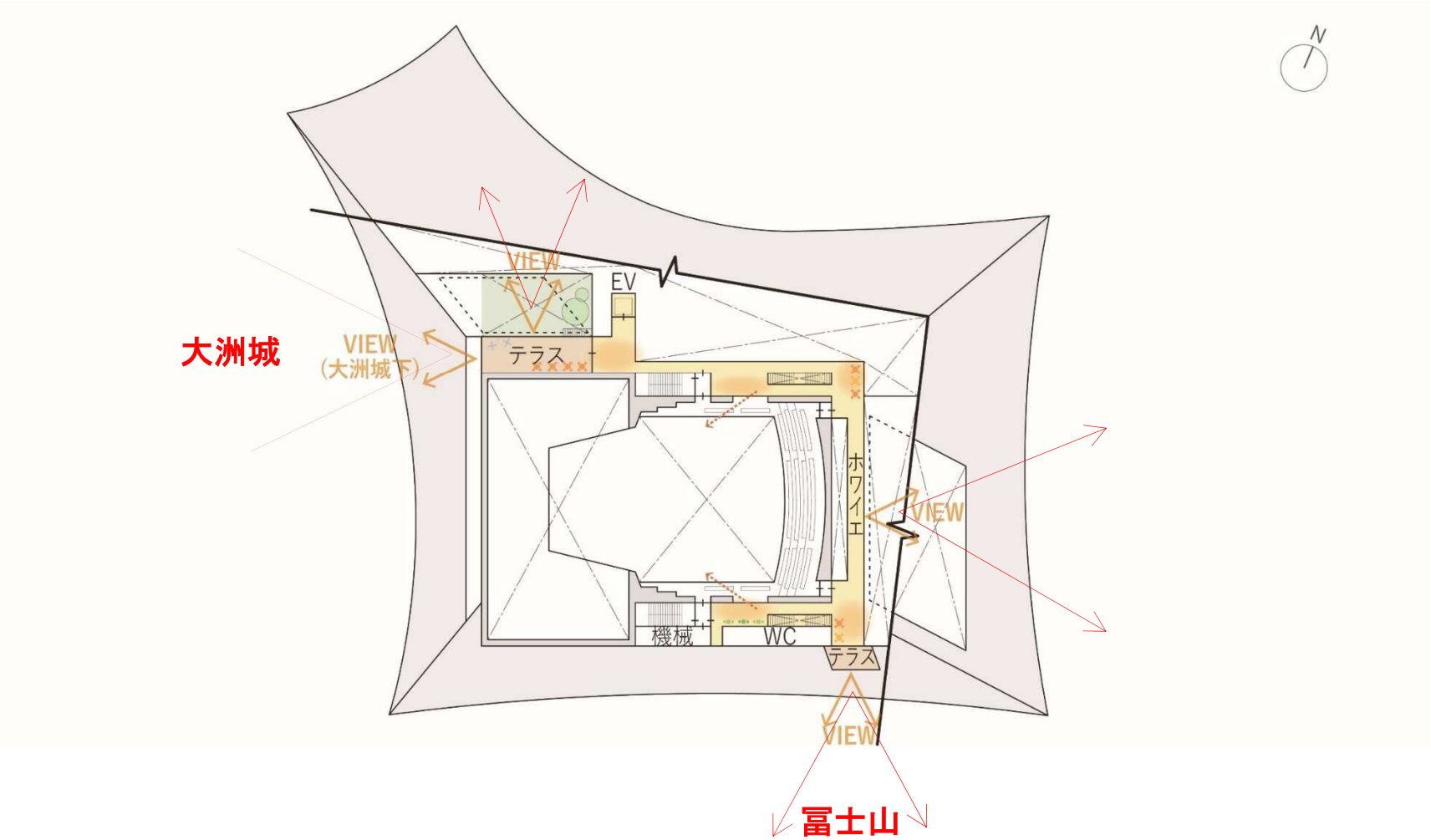
2階



◎2階は「ホワイエでもあり、多様な居場所にもなる」 階

中庭のまわりは、テラスもあって、自然が感じられる憩いの場
一方、吹き抜け側は、『おおず回廊』に面した多様な居場所

3階



◎3階は「まちを眺める、ホールも眺める」場

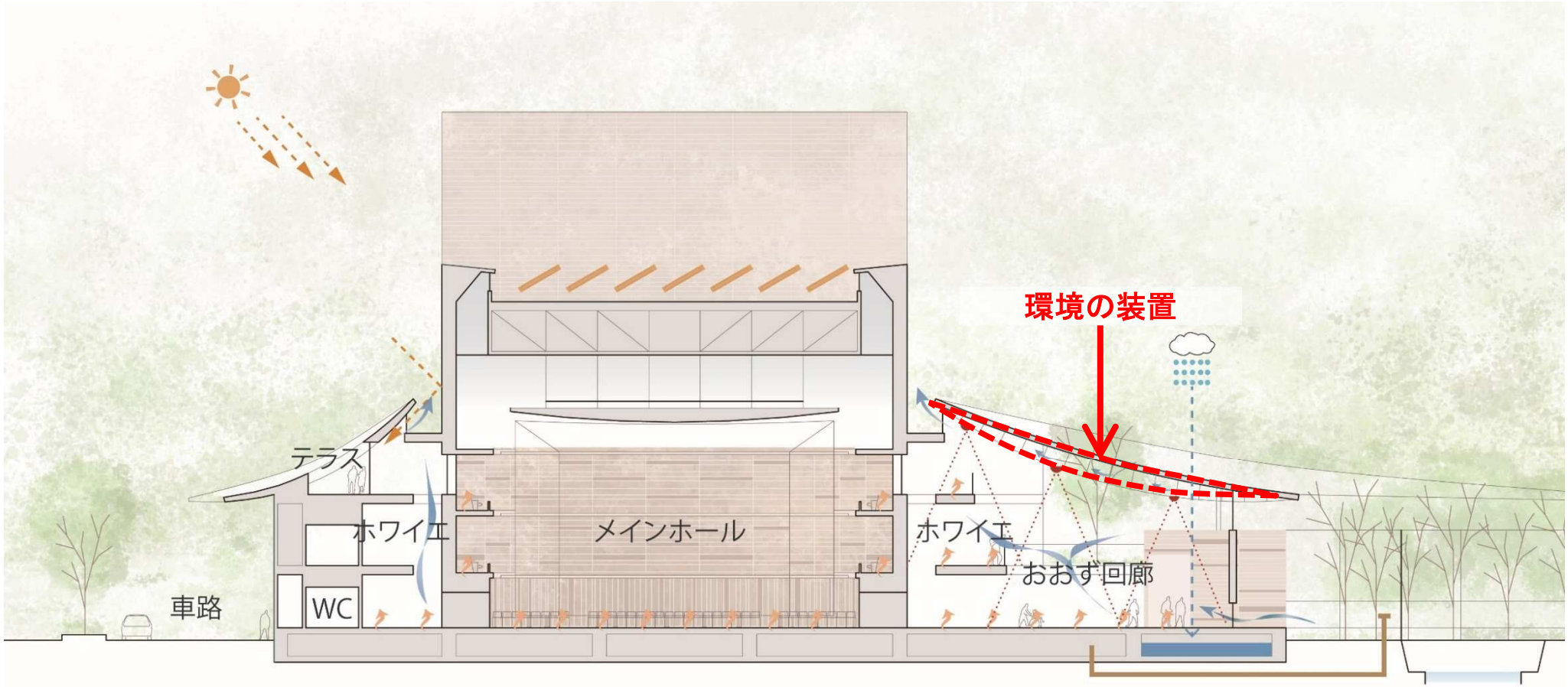
開口からは、まちの景観を眺めることができる
それだけでなく、ホールの内部も見ることができる

メインホール

◎メインホールは一体感を大切にする
観客も、演者も、お互いが近くに感じられるホールを目指す

◎舞台を囲むような客席配置として、誰にでも、見やすく、聞きやすいホールとする

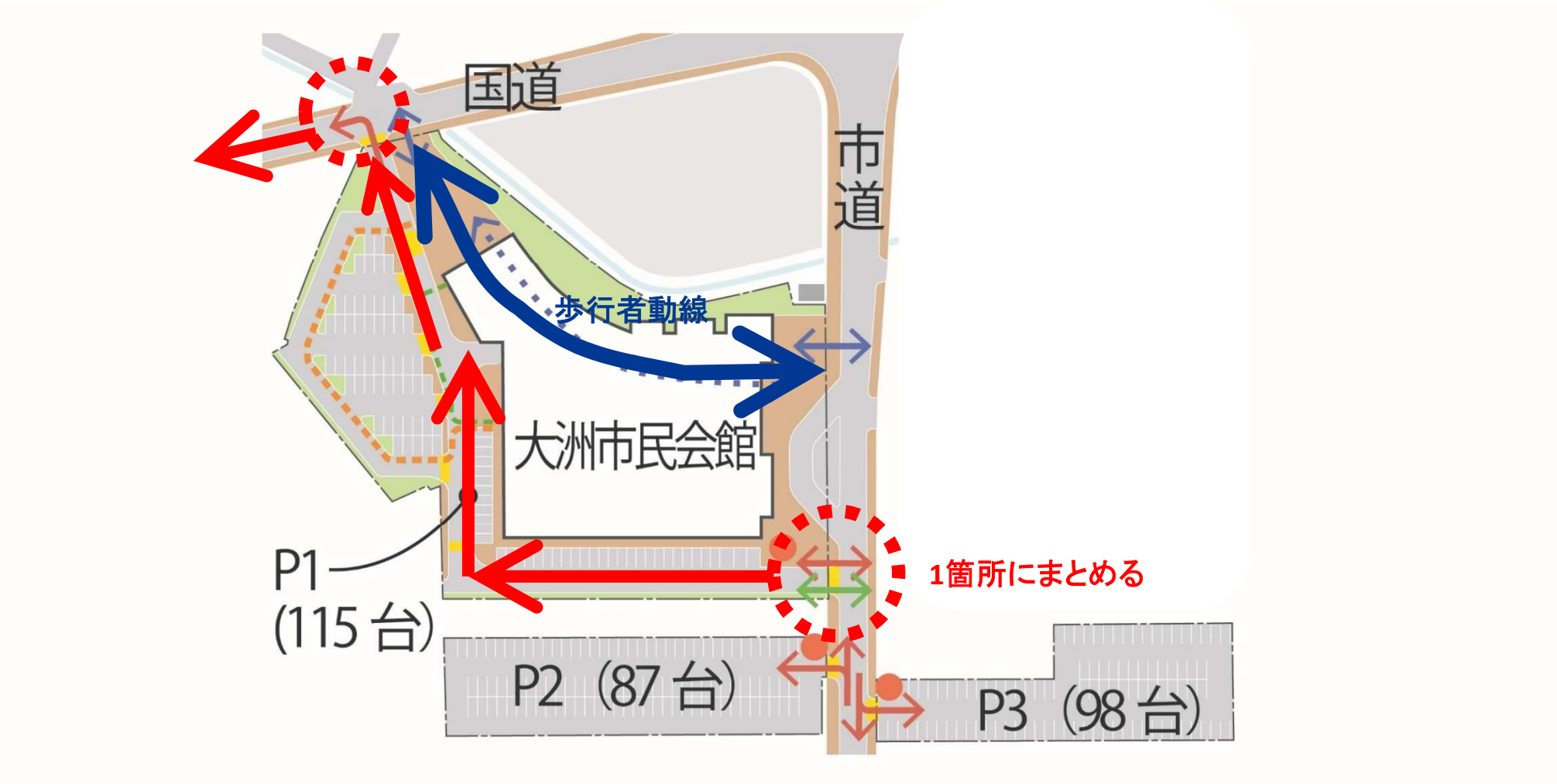
断面



◎パースイメージで見たように、ホールの廻りは勾配屋根
勾配屋根によって内部空間のボリュームを抑える

さらに、この屋根には“環境の装置”の役割を持たせて、建物の省エネルギーを図る計画
具体的には、断熱性を高め、侵入した熱も、その大部分を速やかに排出

駐車場計画



◎市道側に一カ所の「出入り」とすることで、“敷地内の歩車分離”を図る安全安心な計画

国道側は「左折の出のみ」として、交通渋滞への影響を配慮する